

狩野派学習帳 館蔵品展 今こそ江戸絵画の正統に学ぼう

板橋区立美術館（東京・西高島平） 2020.07.11～08.10



「狩野派」（かのうは）は、室町時代から幕末まで実に400年にわたり血縁関係でつながった幕府の仕事を行ってきた絵師の専門集団で、江戸時代には徳川幕府に仕えるため京都から江戸へ本拠地を移した「狩野探幽」（1602～1674）が、「狩野派」の活動を一層堅固なものにした。その「狩野派」は、個人の才能による「質画」よりも模写を重ね伝統を守り伝える「学画」を重視して、和漢の個展を学び画風の継承に務めてきたため、強烈な個性や目新しさを競うのではなく、確かな実力を蓄えた安定感のある筆使いに特徴がある。

狩野惟信 《菊慈童図》 上図は部分 絹本着色 江戸時代中～後期

松に囲まれた山中で小さな滝も落ちる佳境で、一帯には靈気を思わせる霧が立ち込めていて、松も岩も非常に丁寧で整った表現で見るからに特別な空気感が伝わってくる。金泥を使った地表や柔らかく、かつ静かに輝いて作品の主人公である「菊慈童の物語」に相応しい場を作り出している。

「菊慈童」は古代中国の物語で、王に愛されていた慈童であるが、ある事件をきっかけに山の奥深い場所へ流されることになり、慈童を憐れんだ王は、お経の一部を書き与えた。慈童はそれを宝として、日々唱えて暮らしていたが、忘れることがあってはいけないと菊の葉に経文を書きつけておいた。ある日、その菊の葉の滴を口にしたら、不老不死の命を得たという「物語」で、長寿と結びついて、おめでたい能の演目にもなっている。

狩野章信（かのうあきのぶ） 《美人図》



和漢両様の画風に長じた画技をさりげなく描いた浮世絵風美人図で、美人の顔はほっそりとした栄之風である。武家の娘が文机につき、右手に短冊を持って和歌の詩作に想いをかせる姿が描かれ、文机の螺鈿模様や文箱の蒔絵、着物の刺繍の質感描写などが素晴らしい。衝立に描かれた水墨山水は、古様な漢画風を示し、画中に「狩野大玄斎素川藤原影信

筆」の隠し落款がある。上部の襖には没骨猫を主体とした艶やかな濃彩のやまと絵で、春の野山と流水が描かれている作品である。